

## カウンセリング部門の学生相談における近年の特徴

内野 悌司<sup>1)</sup>・磯部 典子<sup>1)</sup>・栗田 智未<sup>1)</sup>  
林 マサ子<sup>1)</sup>・大島 啓利<sup>1)</sup>・弘津 由<sup>1)</sup>  
末永 修治<sup>1)</sup>・石原 克秀<sup>1)</sup>・二本松美里<sup>1)</sup>

Recent Characteristics in the Student Counseling Service of  
the Counseling Section in the 2005-2009 Academic Year

Teiji UCHINO<sup>1)</sup>, Noriko ISOBE<sup>1)</sup>, Tomomi KURITA<sup>1)</sup>  
Masako HAYASHI<sup>1)</sup>, Hirotooshi OSHIMA<sup>1)</sup>, Yuki HIROTSU<sup>1)</sup>  
Shuji SUENAGA<sup>1)</sup>, Katsuhide ISHIHARA<sup>1)</sup>, Misato NIHONMATSU<sup>1)</sup>

Key word: student counseling service, counseling contents, characteristics in the academic year

### I. はじめに

保健管理センターでは、相談・診療の実践とそれを支える研究を行うこと、それらを通じて得られた知見を大学やその他さまざまな領域の教育に活かすことが、業務の課題の一つと考えられる。その課題意識のもとに、本研究は日常行ってきた相談を振り返り、近年の相談の特徴や学生の特徴を明らかにすることを目的に行った。このような特徴を明らかにすることは、個別的な相談や対応、支援に応じる際の準備に役立つであろう。また、学生を対象とした授業や教職員を対象とした Faculty Development (以下、FD) などにそうした知見を盛り込むことは、学生の直面している問題・課題について理解されるようフィードバックすることになり、学生には問題の予防や心理社

会的な発達を促進することにもつながるであろう。

### II. 方法

当センターでは、学生個々について面接申し込み票と面接の経過から、いくつかの項目についてデータベースを作成している。今回の研究ではその項目の内、相談受付月、所属部局、入学後年数、来談方法、相談内容の分類および主訴の具体的記述、連携者、面接回数項目を個人が特定されることのないように加工してデータを抽出した。それを項目ごとに集計した。関心に応じ2つの項目をクロス集計した。相談内容は9つのカテゴリーに分類し、具体的内容については主訴を書き出し、それを内容によっていくつかのアイテムにまとめる作業を行った。今回のデータでは、具体的内容

1) 広島大学保健管理センター

1) Health Service Center, Hiroshima University

が必ずしも記述されていなかったため、各アイテムに分類される度数を算出することはできなかった。結果は紙面の関係でグラフ化したもののみを掲載した。

### Ⅲ. 結果および考察

#### 1. 来談学生の実数と延数

学生が実際にどのくらいカウンセリング部門を利用しているかを把握する上で、来談学生の実数と延数を示したのが図1である（教職員や保護者からの相談は含まない）。大学キャンパスの統合移転が終了し、カウンセリング部門が大学本部の1階に設置され、来談者は年々増加を続けた。平成13年は長年勤めてきた常勤カウンセラーが異動したため一時来談者が減少したが、平成14年に総合科学部学生相談室と統合したので、来談者が一挙に増えたように見えるが、その後漸減している。平成17年に常勤カウンセラーの定員が1減してからは、来談学生は毎年200名前後を推移し、延数は2,100名台に漸増している。来談学生を在籍学生で除した来談率は、ここ5年間で1.0%~1.4%を示し、平均1.2%である。来談者がピーク時よりも減ったように見えるが、メンタルヘルス部門に精神科医が常勤化され充実し、カウンセリング部門との間で来談の棲み分けが進んだ結果と考えられる。

#### 2. 月別の新規来談者数

学生が相談に訪れるのになにがしかの特徴があるのかを探索するため、一年の暦にしたがって新たに相談する学生がどのような動向を示すかをグラフ化したのが図2である。このグラフから2つのパターンが見て取れる。1つは、前期において4月が最も多く5月に減って6月にまた増えV字型を示し、その後漸減して夏休みである8月や9月は最も少なく、後期が始まる10月に前期ほどではないが2回目のピークを示し、漸減していく。2つ目は、4月の出だしはそう多くないが5月から6月にピークを迎え、7, 8, 9月は明らかな減少傾向を示す逆V字型を示し、後期の始まる10月に増え11月は減り、12月、1月にまた増え、その後漸減してM字型を示している。

すなわち前期・後期の新学期の始まりとともに相談件数が増え、夏休みは最も少なく、学年末試験や卒業論文、修士・博士論文の提出が迫る12月や1月になるとまた増えており、当然のことながら大学の年間スケジュールと関連が高いことを示している。

#### 3. 学年別の来談率

どの学年（入学後の年数）の相談が多い少ないかの指標として、来談した学生の入学してからの年数によって、学生数をその年に該当する在籍学生数で除した来談率の最近5年間の推移を示したのが図3である。入学後の年数を学部はBで、大

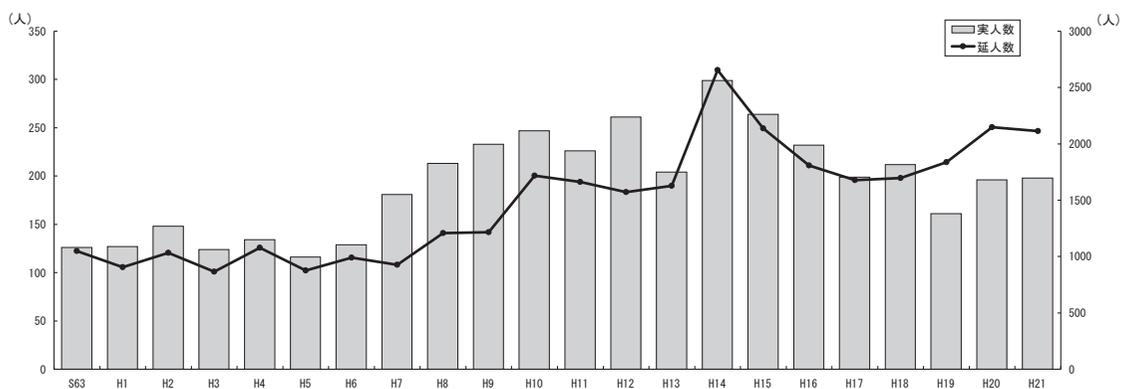


図1 年度別来談学生の推移

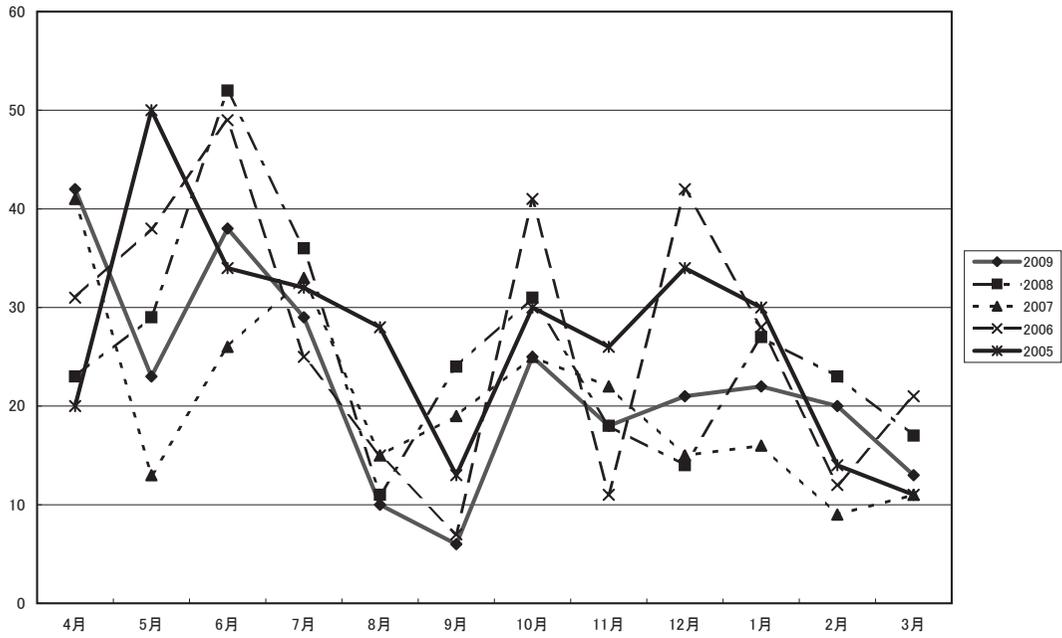


図2 月別新規来談者数

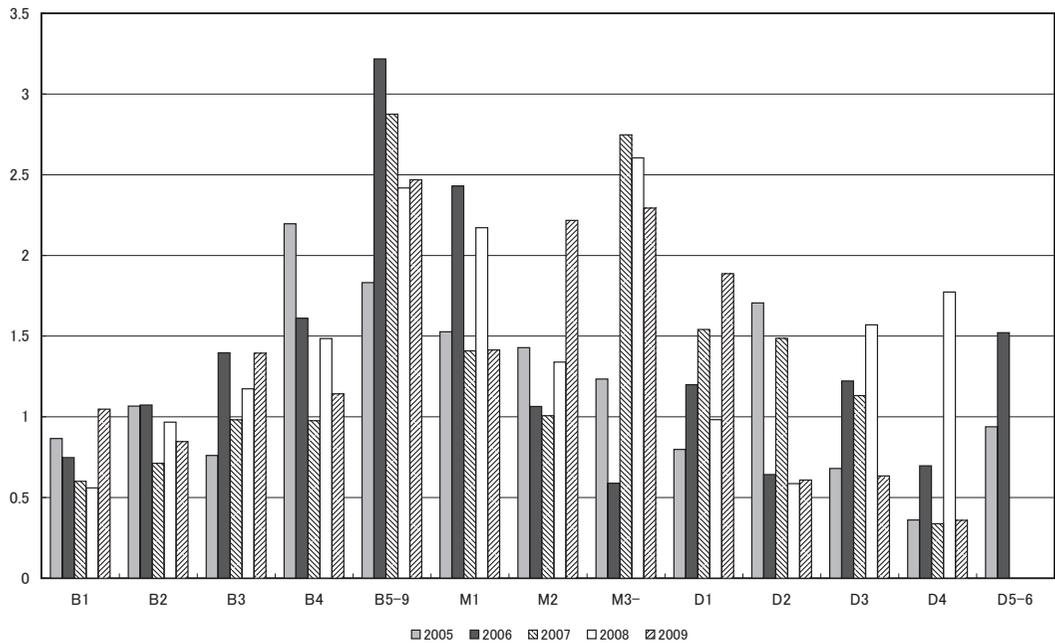


図3 学生・院生の学年別来談率の経年的推移

学院博士課程前期はMで、博士課程後期はDでそれぞれ示している。なお、医歯薬総合研究科博士課程と法務研究科は、Dとして集計している。入学後年数としたのは、学年進級のあり方は学部によって違いがあり、留年や休学をはさんでいるとしても入学後の年数の方が、所属学年次よりも影響が大きいと考えたからである。

学部では、入学後の年数が増えるほど来談率も高くなっている。博士課程前期では、M3以上が高いのは学部と同様の傾向であるが、M1がM2よりも高い。博士課程後期では、年によってばらつきがあるものの、D1が高く学年数が進む程来談率は低下する傾向があるが、D5、6が高い年もある。後の項目で入学後年数に特徴的な相談内容を検討し、学年歴と相談内容との関連を考察する。

#### 4. 来談経路

学生が相談に来るのに、自発的な来談であったか、誰かから紹介されてきたかについて示したのが図4である。これは相談の受付時に書いてもら

う申し込み用紙に記載された項目である。グラフの中の数値は実数が示されている。自発と紹介では、自発が4割前後から5割近くを示し、紹介は5割前後から6割近くを示している。

自発では「その他」が多く、保健管理センターの存在を健康診断等を通じて既に知っていたため相談に至ったと考えられるものが最も多く、相談したいと考えたときにウェブや入学時に配布される入学の手引き、チラシを見て来談している。近年では学生は困った時にはウェブを検索してきていることが示唆され、ウェブによる情報を充実させることが効果的であると考えられる。

紹介については、指導教員やチューターが高い傾向にあり、学生にとって大学の中で身近な存在であり、学生の変化に気づきやすく、それが紹介につながっていることが示唆される。また、本学では毎年3月には新入生のチューターになる教員を対象にチューター研修会を実施し、FD等において気になる学生がいたら保健管理センターに紹介してもらうように促していることも影響してい

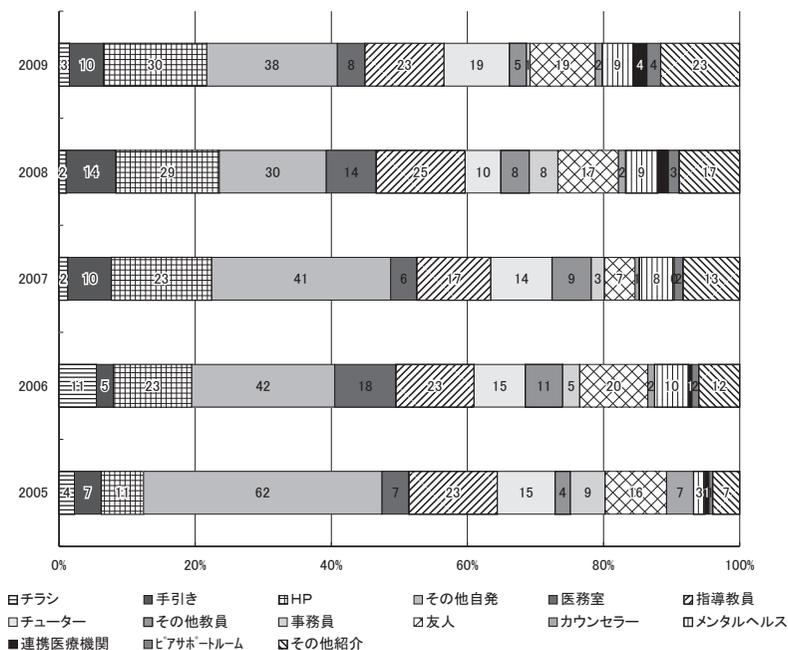


図4 来談経路の経年的推移

ると考えられる。

友人からの紹介も多く、友だちに相談したときに保健管理センターに相談してみてもと勧められて来談することが多いことが示唆されている。

保健管理センターの医務室やメンタルヘルス部門、学外の連携医療機関からの紹介も一定割合を示し、身体の不調やなんらかの精神的自覚症状などからカウンセリングを紹介されて来談されていることが示されている。

その他の教員とは、指導教員やチューターではなくても学生が受講する講義の担当教員などであり、関わりをもつうちに気になる学生を紹介しているのである。

職員からの紹介もコンスタントにあり、窓口で学生と対応する際に気になる学生が紹介されている。その他紹介の中には保護者が最も多い。

このように多様な人から紹介されて来談されることが示されている。学生にとって身近な人が、学生の変化に早く気づいて来談を促すことの重要性が示唆されている。どのように来談を促すか、

紹介するかはいへん繊細な配慮と対応が必要とされる。そのためにFDなどの研修では、どのような学生に気をつけて見守ってほしいかという知的理解について情報提供するだけではなく、そうした学生を発見した場合、どのように専門機関に紹介し、相談につなげてもらうかといった関わり方を習得してもらうことが重要であると考えられる。

### 5. 相談内容

どのような相談が実際にあるかを把握することは、われわれが学生にどのように対応するかを考える上で有益であると思われる。ここでは最初に学生がカウンセリング部門に相談に来た経緯について、どのような悩みをもっていたか、どういう意図をもって来談したかなどによって、主たる相談内容の κατηγοリーを分類し、経年的推移を示したのが図5である。

心理・精神面のことが最も多く、対人関係、修学・履修上のこと、進路就職上のことと続いている。

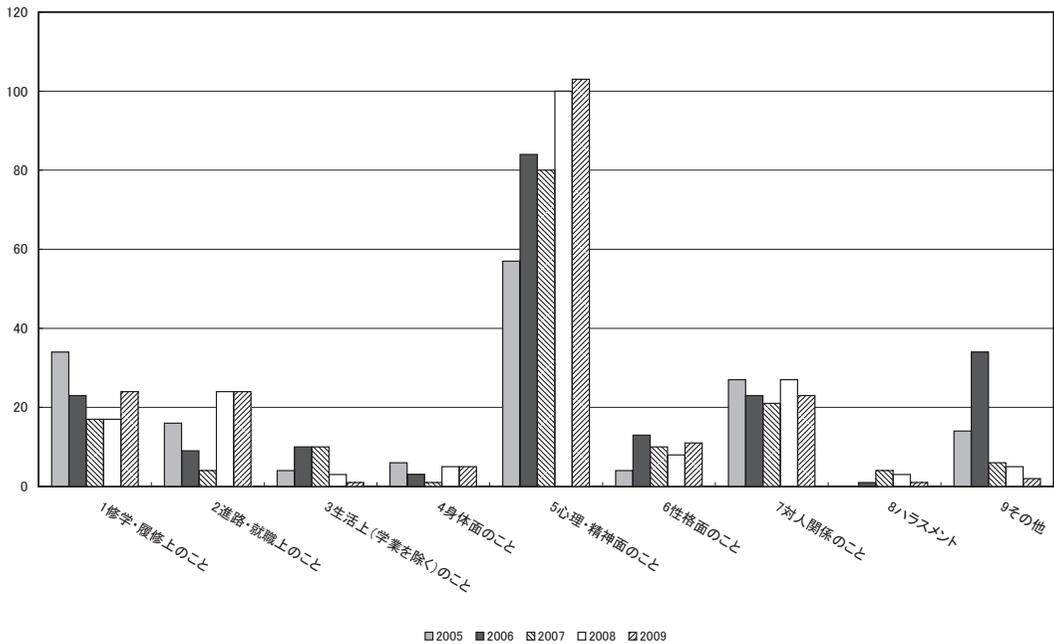


図5 主訴分類による来談学生数の経年的推移

る。しかしながら、どのような相談内容もさまざまな要因が絡んでおり、複合的な悩みをもっている。以下カテゴリーごとに具体的な相談内容をさらに分類し、その特徴や関連する要因を検討する。

### 1) 修学・履修上のこと

①やる気が起きない、勉強に興味をもてない、授業に出る意味を見いだせないといった意欲減退や目的・目標の不明確感を要因とするもの。②授業がわからない、勉強について行けず留年しそうで心配、授業についていけず単位がとれていない、勉強についていけず学校に来ることが苦しい、専門の授業についていけない、留年して悩んでいる、卒論・修論・研究に行き詰まっているなど、授業についていけないことや単位を取得できない、研究に行き詰まっていることを要因とするもの。③大学になじめない、友だちができない、人が苦手、人と話せない、研究室に居づらい、指導教員とうまくつきあえないなどのため、授業・研究室に行けないといった、対人関係の問題が修学・研究に影響する要因。④一度休んでしまっただけで授業に出られない、学校に足が進まない、なぜか授業に行けないなど、本人にもよくわからない理由で修学に問題を抱えているもの。

### 2) 進路・就職上のこと

①入学したが合わない、第1志望ではなかった、専攻が合っていないなどのため、やる気が起きない、やめたい、休学したい、転学部・再受験したいなど入学時の志望校や志望学科・専攻などが不本意であることを要因とするもの。2年次、3年次、4年次に進む時に行われるコース・専攻・研究室の振り分け・配属などにおいて、希望通りにいかなかったために満足できない、納得できないなど、不本意であることを要因とするもの。内定をもらったが希望した企業ではなかった、勤務地ではないといった就職が不本意であることを要因とするもの。②大学で何が学びたいかわからない、やりたいことがわからない、就職先をどこにしたらいかがかわからない、将来のビジョンが見えない、進路が決まらずやる気がでない、自分のやりたいことがわからず就職活動がうまくいかない、やりたくないことなので研究室にいけなく

なった、研究に対して意欲がなくなり進路変更を考えているなど、目的や目標の不明確感を要因とするもの。③将来のことを思うと不安、就職先について自分の選択が正しかったのか不安といった漠然とした不安や不安全感を要因とするもの。④大学院進学に失敗した、就職活動がうまくいかないなどのため、落ち込んでいる、眠れない、体調不良になったなど、ある事態に対処困難になっているもの。

### 3) 生活上(学業を除く)のこと

サークルやバイト先などでのトラブル、宗教カルトからの誘いなどがある。これは軽微なものから、基本的人権の侵害にあたる深刻なものまでさまざま、学生本人だけではなく大学で対処すべきものもあった。学生生活上でさまざまなトラブルや問題に遭遇することがあるので、困った時に相談できる窓口があることを学生に周知することが必要であると考えられる。

### 4) 身体面のこと

めまい、動悸、頭痛、吐き気、食欲不振、腹痛、便秘、下痢、胃が痛い、腸の調子が悪い、手足のしびれ、疲れやすいなどさまざまな身体の不調を来している。その背景に心理的問題があるのではないかと本人が自覚して相談に来る場合と身体の不調でメディカル部門や近隣のクリニックを受診してカウンセリング部門に紹介される場合があった。その他、自分の体型が気になって来談されるものもあった。

### 5) 心理・精神面のこと

①意欲が湧かない、無気力、朝起きられないといった意欲減退・無気力状態。②気分が沈む、落ち込み、気分が不安定、不眠、ネガティブな考えにとらわれて物事に集中できない、涙が止まらない、何事にも喜びや悲しみが感じられない、人と会うのが億劫などの気分障害。③死にたい、消えてしまいたいなどの希死念慮。④大量服薬、リストカット、抜毛などの自傷行為。⑤漠然とした不安がつきまとう、自信がないといった自己不安全感。⑥人とコミュニケーションがとれない、人前に出るとうまく話せない、人を意識しすぎる、異常に緊張するといった対人緊張やコミュニケーション

の苦手意識。⑦孤独である、自分の居場所がないと感じる孤立感や疎外感。⑧過呼吸、パニックになる、不安や緊張で息苦しくなる、円形脱毛症、吃音、体臭が気になる、強迫症状、確認行為がやめられない、アパートの物音が気になるといった神経症的症状。⑨拒食、過食嘔吐といった摂食障害。⑩授業に出られない、研究室に行けない、人目が気になって外出できないといった不登校、引きこもり。⑪同性愛かどうか、自分の身体的性に対する違和感、自分の性別がはっきり認識できなくなったといった性同一性 (gender identity) や性的指向性についての葛藤。⑫以前の苦痛な体験のフラッシュバックが起こるなどの心的外傷にかかわる問題やストレス反応。⑬父親、母親、兄弟姉妹、友だちが亡くなったり、自殺したといった喪失体験とそれにとまなう情緒の問題。その他にもさまざまな個別的な心理的問題を抱えて相談に来ている。

## 6) 性格面のごと

①友だちに本音で話せない 過剰に気を遣う、対人関係がうまくいかない、自分の性格では社会で自立してやっていけないのではないかと、自分の考え方感じ方の偏りが不安になるなど、自分の性格についての悩み。②自分について知りたい、就職活動に際して自分のことを整理したい、他人の目を意識するのを取り除きたい、ネガティブ思考を変えたいなどの成長動機づけによる相談もある。

## 7) 対人関係のごと

①同級生になじめない、異性とうまくつきあえない、研究室での人間関係がうまくいかない、指導教員とうまくつきあえないなど性格や過去の対人関係に由来する対人関係一般の問題。②ある人との関係で傷ついたり嫌な思いをした、ある人とうまくつきあえない、トラブルがあった、研究室が合わないと感じるなど、特定の人や集団との対人関係上の問題。③親子関係が悪くそのことで勉強に集中できない、過去の親きょうだいとの関係で今も悩んでいるなど、家族関係の問題。④彼女とうまくいかなくてイライラする、彼氏との関係で錯乱状態になる、元カレから暴力を受ける、元

カノからつきまといられるなどの恋愛関係上の問題。

## 8) ハラスメント関連のごと

指導教員との関係での問題が最も多く、そのほか研究室の先輩やサークルの先輩との関係などで理不尽な思いを体験している相談がある。ハラスメント相談室からの紹介で心理ケアを行うケースもある。ハラスメントの行為者の言動はなかなか変わらなかつたり、環境調整がうまくいかなかつたりするため、被害者は非常にストレスを感じたり、学業や研究をこれ以上継続できないと退学や進路変更を余儀なくされることもあり、相談員が対応に苦慮することがしばしばある。

## 9) その他

上記の分類にあてはまらないトラブル関連の相談内容であったり、かつて面接に来ていた学生がその後の経過報告に来てくれたりしたものなどがあつた。

## 6. 各学年に見られる相談内容の特徴

入学後年数によって特徴が見られるので、学年歴という時間軸との関連で検討する。入学後の年数をここでは〇回生と表記した。以下の特徴は、分析データの相談内容において具体的に記述されたものを学年ごとに整理し抽出したものである。

### 1) 学部1回生の特徴

上記6相談内容の1)や2), 7)にあるように、大学のカリキュラムや履修システム、新しい環境にどう慣れて、自分自身の目標などを明確にして学生生活に適應するか、あるいは不本意入学であつたとすれば、転学部や再受験など進路変更を行うか、その状況と折り合いをつけて学生生活に入るかなどがまずは課題となる。吉良・田中・福留<sup>1)</sup>は、①新しい修学環境への適應の課題、②新しい生活環境への適應の課題、③大学・学部選択の課題とまとめ、鶴田<sup>2)</sup>は、「1年生は今まで慣れ親しんだ生活から離れて、新しい学生生活へと移行する時期だと思ひます。新入生は大学への入学にともなう課題と、入学以前から抱えてきた課題に直面します」と記述しており、本研究結果も符合している。

かつて、たとえば平成15年度の来談学生実数は1回生が66名(全来談学生264名)で25%<sup>3)</sup>、平成16年度は69名(全232名)で30%<sup>4)</sup>を占め、1年生の割合が最も高かったが、近年は図4が示すように、学部1回生の来談は少なく、学年が上がるほど来談率が高くなっている。この傾向は近年続いている。入学後の学生生活や新しい環境への適応よりも、修学や進路上の問題ほか、さまざまな主訴で学年が上がるにつれて来談学生が増えていることを示している。

## 2) 学部2回生の特徴

2回生は1回生時の課題にうまく対処できないと、修学上では単位修得が少ないために修学上のプレッシャーが高まったり、専門の授業についていけなかったり、志望のコースや専攻に進めなかったりなどの事態も起こり、修学行動を回避し生活リズムが乱れ、不登校がちになる学生が出てきている。

修学行動をとれない学生でも、サークル活動やアルバイトができれば、対人関係や居場所が確保できるが、それらも難しい場合、大学や学生生活になじめないばかりではなく、友だち関係や社会的つながりが希薄で孤立し、心身に不調を来したり、引きこもりがちになる学生がいた。

## 3) 学部3回生の特徴

修学上の問題については、成績不振や勉学についていけないなどがさらに顕著になっていた。学部によっては研究室配属になるが、志望通りにならないことがあり、勉学に対する動機づけに影響し、進路選択に思い悩む学生もいた。

鶴田<sup>2)</sup>は、2、3年生を中間期と位置づけ、「大学生活への初期の適応が終わり、将来へ向けての選択がしだいに近づいてくる時期であり、(中略)学生生活を展開して自分らしさを探求することが課題となります」と述べている。今回の研究では、相談に訪れる学生には、近年の3年後期から就職活動が始まるにつれ、何がしたいかなどがわからず、将来のビジョンを描けなかったり就職活動に支障を来したりして、焦りと不安に苛まれる学生も増えていた。また、サークル活動で幹部になってその運営にストレスを感じたり、アルバイトと

学業の両立が難しくなったり、ギャンプルに耽ったり、さまざまな形で葛藤が強くなり不調を来す学生がみられた。

## 4) 学部4回生の特徴

4回生では、卒業研究や就職活動を含む進路選択をめぐる課題がある。近年では研究室に配属され、指導教員や大学院生の先輩、同級生との関係に難しさを感じたり、自分でテーマを設定し能動的に取り組む卒業研究が困難となって研究室に行けなくなる学生が増えている。就職活動がなかなかうまくいかず、自分自身を否定されたように感じて心身の不調を来す学生もいる。そのほか、鶴田<sup>2)</sup>が「卒業という節目を前にして、今まで未解決であった課題を整理し、内面的な『もう一つの卒業論文』を書くような作業をする学生がいます」と述べている<sup>2)</sup>ように、親子関係を見直したり、学生生活を終え社会に出る前に自分自身と向き合い内省を深めたりするためにカウンセリングを受けに来る学生もいた。

## 5) 学部5回生以上の特徴

5回生以上では、勉強についていけない、勉強に身が入らない、卒論を書く意欲が出ない、講義に出られない、就職活動ができないなどがあり、そのことを親に言えない悩みもあり、体調不良や気分障害が現れたり、大量服薬などの衝動行為がみられたりする場合もあった。図4から来談率は最も高い傾向があり、過年度生は卒業や就職をめぐってストレスが高いことが示唆された。

## 6) 大学院博士課程前期1回生の特徴

大学院に進学すると、研究センターの生活となり、生活の場は研究室中心、対人関係は指導教員や研究室の先輩・同輩・後輩との関係が中心となる。相談内容もそれを反映し、研究や研究室をめぐる問題、その結果のさまざまな悩みや心身の不調についての相談が多い。

大学院での研究については、学部までとは違い、求められる水準が高まり、研究に対する不適合感をもつ院生もおり、そのために意欲の低下やうつ状態などのさまざま不調を来したり、進路変更を考えたり実行する院生もいた。研究に対する問題は大学院に進学した学生の多くには避けられない

ことであり、それらを通じて、その後就職か後期課程進学かの進路選択、その他将来設計を検討する課題に取り組むものである。

齋藤<sup>5)</sup>が指摘するように、近年では就職難や青年期の遷延化といった社会状況、大学院重点化に伴う入学定員の増大や入学経路の多様化があり、それらを背景に目的意識が不明確なまま進学して問題に直面する前期1回生が増えている。また、他大学出身者は大学院の環境や研究室の「風土」、求められる水準、理系であれば実験機器の操作などに戸惑いや違和感をもち不適應を起こすことがしばしばあり、受け入れ体制を整える必要性が高まっている。

#### 7) 大学院博士課程前期2回生の特徴

この時期は、修士論文の作成および進路決定が最大の課題であり、それにとまなう相談および課題達成の過程で遭遇する指導を受ける教員や先輩との関係などについての相談が多かった。そうした相談の中で主体性を問われること、自分自身と折り合いをつけていくこと、環境との調整などが課題となることが多い。

それらの課題が達成できず3年目を迎える学生は、さらに悩みや葛藤が深刻となり、来談率も高まっている。

#### 8) 大学院博士課程後期院生の特徴

大学院後期課程に在籍する院生についても入学後年数によって違いはあるものの、後期課程に進学する学生は数的にも絞られ、課程の全般的特徴の方が明確であると考えられた。

後期課程に進学する学生は、博士学位論文をまとめ、アカデミックポストや専門職を求める者がほとんどである。たとえ学位取得を達成しても、現実に存在するポストは限られており、就職待ちの不安定な生活状況にとどまる者も多い。すなわち後期課程ではたいへんな努力を強いられるとともに、先行きが不透明なため、ストレスや葛藤は高いのが一般的である。後期課程の院生では、慢性的な疲労感や神経症的症状を呈するものに加え、被害念慮的な思考や衝動性の高まりがみられるケースもあった。

## IV. おわりに

カウンセリング部門の過去5年間の学生相談の特徴を分析したところ、多様な相談があることが明らかになった。大学の相談室ということからも当然であるが、修学のことや進路のこと、学生生活上のことと関連する内容や心理的問題、大学時代に取り組まれている心理社会的発達課題が特徴的であった。また、来談学生の学年によって相談内容にも特徴がみられた。鶴田(2001)は、「学生生活サイクル」という概念を提唱して、学生が取り組む心理的課題を明らかにした<sup>2)</sup>。本研究でも、学生の個別的な悩みや問題であっても、しばしば学生に共通した大学生期の問題や課題であると確認された。このような点からも、学生相談が学生の悩みや問題を解決するのを援助する役割もさることながら、学生を育み見守る発達促進的な役割も重要であると考えられる。

今回はカウンセリング部門が受けている相談の中で学生からのものに限定したが、当部門では、学生のことについて教職員コンサルテーション(他の専門職に対する相談、助言)を積極的にやっているため、その特徴についても今後分析したいと計画している。

## 引用文献

- 1) 吉良安之、田中健夫、福留留美：学生相談来談者の学年ごとの問題内容と学生期の諸課題、学生相談研究、28：1-13、2007.
- 2) 鶴田和美：学生生活サイクルとは、鶴田和美編、学生のための心理相談、培風館、東京、pp2-11、2001.
- 3) 広島大学保健管理センター編：表4「学部別・入学年度別来談者実数」、PHOENIXHEALTH、(46)：70、2004.
- 4) 広島大学保健管理センター編：表4「学部別・入学年度別来談者実数」、PHOENIXHEALTH、(47)：70、2005.
- 5) 齋藤憲司：大学院学生の特徴、鶴田和美編、学生のための心理相談、培風館、東京、pp42-53、2001.